語学スキルから＜教養＞へ

――大学教育とヤコブソンの「選択」の概念――

鈴木　哲平
（江戸川大学）

一度は＜死んだ＞と思われた大学の教養教育が、多くの大学のホームページを賑わせている。教養という言葉の遣われていない大学を探すのが難しいくらいである。むろんそれは、古典と呼ばれる文学や哲学を読み漁るようなかつての教養ではない、新しい＜教養＞である。新しい＜教養＞の中で、教養プログラムの支柱を成す英語科目は、いかなる役割を果たしうるのであろうか？

1.不死の＜教養＞

1991 年の大学設置基準大綱化にともない、全国の大学において教養課程が縮小、解体されていった。東京大学など一部の大学を除いて、かつての教養課程は廃止されるか、「国際文化」や「総合人間学」といった看板を掲げる独立した一学部に変貌したのである。

とはいえ 2016 年現在、大学教育から教養が完全に消し去られたわけではない。それどころか、大多数の大学では、「（全学）共通教育」「一般教育」「基礎教育」などの名前で、かつて「教養課程」で扱われていた内容が、規模こそ縮小されたとはいえ、保たれている。その場合、複数の学部をカバーする教養教育プログラムが一般的だ（日本大学のように一学部が大学に匹敵するほどの規模の場合、あるいは、芸術系のような小規模単学科大学では、教養教育は学部に埋め込まれている）。

竹内洋が指摘したように、明治末から大正、昭和まで生き延びたいわゆる「教養主義」、いわゆる古典を読むことによって人間的な成長を目指すこの知的態度が、社会的に承認、共有された価値ではなくなっているというのは否定しがたい事実である。しかし教養は大学から姿を消してはいない。それどころか、大学が大学たるゆえんとでもいわんばかりに、大学の看板の大きな部分を担っている（たとえば、大学と専門学校の区別を考えてみよ）。ただしその内実は変わっている。キーワードはかつてのように「古典」や「人格形成」ではなく、「問題解決」「グローバル」である。典型的な例として、筆者がかつて教壇に立ったことのある獨協大学のホームページを見てみよう。

> 現代の地球的規模の問題群として、たとえばアフリカの干ばつ、食糧問題など、平和や環境を含め、数多くの難題を抱えています。しかし、どの問題一つとっても、全世界、地球的規模で取り組まなければならないと解決のつかない問題ばかりです。
>
> しかし、いまだ世界には、そのための共通の精神的基盤や世界を結ぶ、普遍的な精神の紐帯が見いだせない状態です。ゆえに、本学が標榜している建学の理念「大学は学問を通じての人間形成の場である」の重要性があります。この基盤なくして世界の幸福や平和はありえません。本学では、この理念のもと、新しい教養主義を掲げ、全学共通カリキュラムを通じて、理想実現に向けて取り組んでいきます。（下線部筆者）

「世界」や「問題」の言葉が並ぶ。高邁な目標であると、素直に言いたい。私はすべての日本の大学のホームページにあたったわけではないが、教養の目指すものとして、問題解決やその背景としてグローバル化を挙げる大学が少なくないことは確言できる。この「新しい教養主義」が、現在の「教養」であるというコンセンサスがあることは、間違いないとみていい。教養はその中身を変えて大学に生き残った。あるいは、教養を廃止してみて逆に、教養が大学の本質と何らかの意味でかかわることが、皮肉にも証明されたと言ってもいいかもしれない。

2.グローバル問題を解決する英語？

現在私は大学で主に英語科目を担当している。英文学や英語を直接研究対象とする分野、英語の使用が学部レベルで研究上必須である学科を除き、多くの大学では英語は教養課程、教養科目に位置付けられている。つまり、大学科目としての英語は、「グローバル化」「問題解決」のための科目と位置付けられているということができる。そこで生じるのは、大学で教えられる英語が、どのようにして「問題解決」に結び付くのかという疑問である。

イメージしやすいのは、大学で英語を学び、その英語力を活かして、例えば国連、JAICA のような日本の行政機関、あるいは自ら NGO を立ち上げて活動するようなことではないだろうか。つまりその場合、教養としての英語は、学んだ結果として、英語の高度な運用能力が身に付き、現地での行政との折衝や法律的な対応、事務的な処理能力が、英語をとおして可能である状態であることが想像される。

だが、言うまでもなくこのような形でグローバル世界の問題解決にかかわる人間はごく限られている。私は大学で（試行錯誤しながら）行われている具体的な教育方法や、個々の学生の学力、学びへの姿勢といったことを問題にしているのではない。能力を別にしても、グローバルな問題に関わる（関わりたい）人間の数は限られており、今の大学の教育制度は、こうした能力を厳しく要請するような制度になっていない（実際に実施されている単位認定や卒業認定の基準が、大学で求められる「成果」の水準を暗示している）。あるいは、以下のような疑問もわく。つまり、英語を教養科目として設定することは経緯的に正当化されるとしても、すべての学生に問題解決にかかわる英語力を求めることが、果たして大学教育として目指すべき立場なのか。

結論から言えば、英語運用能力の完成度だけに注目するのは間違っていると私は考えている。もちろん、英語が読めて、書ける、英語で会話できるといった能力が少しでも向上するに越したことはない。しかし、そこだけが問題であるならば、留学したり語学学校に通ったりすることと大学の英語教育に本質的な差異がなくなる。じじつ、そういう意味で大学が語学学校化している現状もある。しかし大学で学ぶということには、それ以上の意味があるはずである（そうでなければ、大学の存立意義を問わねばならなくなる）。繰り返すと、英語を高度に（教員をも凌駕するほど）運用する能力を育てるのは現実問題として相当に難問であり、現行の制度を見る以上、それは期待されていないと考えるべきである。また、大学という制度から考えても、成果のみによってその科目の意義をはかるのは見当外れにみえる。こうして、教養科目としての英語に、高度な英語能力の獲得のプロセスであるという以上の意義が見いだされなければならないことになる。

3.英語学習とヤコブソンの「選択」の概念

多くの場合、大学の英語科目は、Reading, Listening, Writing, Speaking の 4 技能を単位として構成されている。Reading は作業の難度、他の技能への貢献（語彙力向上など）などから、4 つの中で最重要技能、基幹技能であると私は考えている。ここでは日本語で教育を受け、日本語を母語とする学生を想定する（教育の大半を英語圏で受けた学生、いわゆる帰国子女はここでは取り上げない。また最近一部の大学では、英語の知識技能が十分でないアジアの学生が日本に留学して英語の授業に出るという、まことに複雑な状況を呈しているが、これもここでは取り上げない）。また Reading は訳読を方法として用いることにする（近年 skimming や多読など、一字一句を見るより全体からおおざっぱな意味を取る指導が増加しつつあるが、私見によれば、和訳以上に英文の理解を確かめる適切な方法は現時点では存在しない。paraphrasing や summarizing は有効であるが、かなりの英語力を前提とするため、一般的に使用しやすい方法ではない）。

訳読のプロセスは、以下のような作業を含む。一文を句や節に分割する。また that や what のように、接続詞や関係代名詞として文の中で重要な役割を持ちそうな語（機能語）について品詞を選択する（that の例で言えば、当該の that が形容詞なのか、代名詞なのか、接続詞なのか、これらの中から一つを選ぶということ）。さらに名詞や動詞、形容詞、副詞などについて、それがどんな日本語に相当するか英和辞典を引きながら考える。

一文の分割（どこで切るか、どうわけるか）、機能語の機能確定、個々の語の意味の決定。われわれは訳読において、膨大な選択を行っていることになる。そして訳読による読解技能の向上とは、この正確さと速さを向上させていくことだと言い換えることができるかも知れない。ここで、やや唐突ではあるが、言語における「選択」ということについて、ヤコブソンの「選択」の概念を見てみることにしよう。

> ことばにおいては、一定の言語的実体 linguistic entities が選択されるとともに、それらがより複雑な言語単位と結合されている。語彙レベルでは、これは一目瞭然である。話し手は語を選択し、それらを、自分が使う言語の統語体系に従って結合し文にする。文と文は結合され、発話 utterance となる。
>
> （ヤコブソン、146）

> どんな言語記号も、二つの配列様式を持っている。
>
> 一、 結合。どんな記号も、それを構成している諸記号からなっている、および・または別の記号と結合したかたちのみであらわれる。すなわち、どんな言語単位も、同時に、より単純な単

位にとってのコンテクストとなっている、および・またはより複雑な言語単位のなかで自身のコンテクストを見出す。（…）結合とコンテクスト化 contexture は、同じ操作の二面にほかならない。

二、選択。交代要素のあいだの選択は、ある交替要素を、ある点では等価であり他の点では別の交替要素の代わりに用いることを前提にしている。実際、選択と代置は、同一の操作の二面である。（ヤコブソン、149）

ここでは、二つの点を確認したい。第一に「選択」は「結合」とともに言語産出の基本的作業を構成している。人間は自らの中にある文法と語彙を材料に、「選択」と「結合」で言葉を生み出す。第二に、「選択」と「結合」は相互に補完する作業であること。語の選択は結合を拘束し、結合は選択を拘束するのである。そしてこれを選択の側から見たばあい、結合による「コンテクスト化」ということになる（結合が生み出す制限と話者の自由意志＝選択の接点が生み出される言語ということになる）。

これを先の英語訳読に組み合わせて考えてみよう。英文の産出者は、文の法則にしたがって、彼（女）の選択に基づいて語を選び、配置する。読解するわれわれは、脱暗号化 decoding の作業として、話者の語の選択、そして結合法則の選択（膨大な文産出の法則の中のどの法則を用いているかということ）がいかに行われたかということを、やはりまた自分の知識を用いて「選択」する。

4.新しい＜教養＞と英語教育の役割

このように、読解（おそらくは産出も）を構成する各作業は、「選択」の概念でその大半を説明することができる。こうして、文の一義的な意味（仮に）が決まる（少なくとも、「意味が決まる」としなければ、読解の指導ができないことになってしまう。ただし、たとえばこの「一義的な意味」の産出プロセスを逆手にとって、さらに別のレベルの意味を生み出そうとする表現がある。それが地口であり、また詩（文学）である）。

この「潜在的なさまざまな可能性の中から一つを選び取る」という知的行為を、言語の理解というレベルから、より一般的で複雑なレベルに引き上げる。それが冒頭に示した「問題」（世界的、社会的問題、あるいは個人的な問題も含めて）だ。これはすなわち、語学スキルのプロセスを＜教養＞へと読み替えることにほかならない。

何らかの問題に対する解決を見出すということは、言語操作の枠組みを用いれば、問題というコンテクストに制限されながら、解決という「選択」を潜在的な選択肢の中から選ぶことだと言い換えることができるだろう。その「選択」のプロセスは読解でも問題解決でも大枠で同じことになる。すなわち、1. コンテクストや結合を読み取ることができる、2. 潜在的な選択肢を十分に広く用意し吟味できる、3. その中から、正しいと思われるものを選び取り、残りの選択肢を捨てることを選ぶことができる。

（グローバルな）問題解決という場合に注意しなければならないのは 3 のプロセスだろう。先に述べた通り、読解の作業では、少なくとも仮の形で「正解」があり、教員がこれをわかっているという前提がある。しかし、現実の問題には「正解」が何なのか、誰もわからない。その選択から長い時間が経ったのちに、かろうじて歴史的に正解か否か判断されるのが限界だろう。こうした「正解」のなさこそ違え、読解のプロセスは、そのまま問題解決に応用可能だと言える。その意味で、高度な英語運用能力ではない別の形での＜教養＞への貢献を見出せるのではないかと私は考えるのである（「正解がない」という点において、現実の問題解決プロセスと「一義的に意味が決定できない」詩（文学）表現の符合は意味深長であるが、ここでは触れない）。

思想と表現の自由、そして選挙。われわれの民主主義社会では、社会に対する自らの態度を自ら決定しなければならない。「正解」かどうかわからないが「正解」であるはずだとそれぞれが考える結論を「選択」することは、問題解決とともに、成熟した市民として不可欠な知的スキルだと言えよう。それを向上させるのに、語学スキルの向上を応用する。そのとき英語は真の意味で＜教養＞となりうるのではないだろうか。

参考文献

ローマン・ヤコブソン『ヤコブソン・コレクション』桑野隆編訳、平凡社、2015 年
竹内洋『教養主義の没落――変わりゆくエリート学生文化』中央公論社、2003 年
獨協大学「全学共通カリキュラムの歴史」（2016/03/11 閲覧）https://www.dokkyo.ac.jp/zenkari/history.html